

～みんなちがって みんないい (その6)～

昨年同様、今月から神経発達症(発達障害)について、症状ごとに少し詳しくお話していきます。今回は「限局性学習症(SLD/LD)」についてお話しします。内容は昨年と同じです。

「限局性学習症」より「LD」の方が聞き馴染みのある方が多いのではないのでしょうか。「SLD」は「**Specific Learning Disorder**」の略で、世界共通の診断基準書であるDSM-5(アメリカ精神医学会診断マニュアル)に示されている診断名となります。

「SLD」は全般的な知的に遅れはないものの「文字の読み書き」「文の意味を理解する」「推論する」「計算する」「表や図を読み取る」などの学習能力の一部だけが極端に抜け落ちている状態を指します。

「SLD」で有名なのが、映画俳優のトム・クルーズです。映画「トップガン」や「ミッションインポッシブル」などをご覧になった方も多いのではないのでしょうか。

彼がSLDであることは広く知られていて、彼自身もSLDであることを公表し、広く理解と支援を得るための活動を行っています。彼は文字の読み書きが苦手なタイプのSLDで、**読字障害**

(**ディスレクシア**)と**書字表出障害(ディスグラフィア)**の両方であると言われます。文字が上手に読めないのが、映画の台本はスタッフや家族に代読してもらったものを録音し、それを何度も聞きながらセリフを覚えています。現在はある程度、字も書けるようになったそうですが、デビュー当時は自分のサインもきれいに書けなかったようで、サインの一部が鏡文字(左右逆転した文字)になったものもあったそうです。彼は幼少期、SLDの為にいじめにあったこともあり、それが原因で転校もしています。

SLDで有名な芸能人は他にもウーピー・ゴールドバーグやオランダ・ブルームなどのハリウッド俳優や、スティーブン・スピルバーグなどの映画監督など数多くいます。

SLDは前述の「読字障害」「書字表出障害」の他にも、計算や数量が理解できない「**算数障害(ディスカリキュア)**」もあります。

学校場でいくつか例を挙げてみます。

① ディスレクシア(読字障害)の場合

- ・計算はできるが、文章問題はできない
- ・社会や理科のテストはできるのに国語のテストはできない
- ・年齢不相応な漫画や童話の本しか読まないまたは眺めているだけ
- ・テレビ視聴やゲームは得意

② ディスグラフィア(書字表出障害)の場合

- ・ノートやテストの字が雑で、中には本人でさえも読めない字がある。
- ・ノートや連絡帳の書き写しに時間が掛かる
- ・作文で何を書いたら良いかわからず、書き上げるまでに時間が掛かる。拗音や促音表記の間違ひが多い。

③ ディスカリキュア(算数障害)の場合

- ・簡単な四則計算に時間が掛かったり、間違いが多かったりする
- ・九九がなかなか覚えられず、中高学年になっても言い間違える。
- ・図形問題や単位の変換で間違いが多く、量の学習が苦手

上記はほんの一例ですが、思い当たることはありませんか？

SLDは医療機関での検査によって、正しく状態を把握することができます。

SLDの人は普段の生活からは全く困り感が感じられません。会話からも分かりにくく、他の人と変わらないので、本人さえも自覚が無いことがほとんどです。そのため、学習面における自己肯定感だけがとても低く、「自分は勉強が苦手で、さっぱりだったから」とか「自分は体を動かすことは得意だけど、ペーパーは・・・」などの認識で自分を納得させている人が少なくありません。運転免許証が取れない人もいます。子どもの場合は、「やればできるのに・・・」や「学習ができないのは本人の努力不足」と捉えられやすく、中には「勉強できなくても生きていけるから大丈夫」と安易に考えてしまうことがあるため、本来の能力を発揮できないまま、進学や仕事など将来の選択をしてしまう人も多いのです。

SLDは根本的な改善は難しいのですが、個人の特性に合わせて軽減する方法を見つけていくことができます。どうすれば苦手さ困難さを軽減できるのか、どのような進路選択があるのかなど、健やかな成長のために今を大切にすることが重要です。